



TITLE:

倫理的行動の正当化 ー機械論的 人間像からの脱却ー

AUTHOR(S):

山根, 卓二

CITATION:

山根, 卓二. 倫理的行動の正当化 ー機械論的人間像からの脱却ー. 経済
論叢 2000, 166(2): 67-80

ISSUE DATE:

2000-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/45367>

RIGHT:

經濟論叢

第 166 卷 第 2 号

-
- 商業・富裕と徳の変化……………田 中 秀 夫 1
- 国保保険料(税)賦課政策と
被保険者負担(2)……………小 松 秀 和 17
- 外国為替市場の不安定性についての分析……………國 枝 卓 真 32
- ヴェルテンベルクにおける
編物産業内の社会的分業の展開(1)……………森 良 次 51
- 倫理的行動の正当化……………山 根 卓 二 67
-

平成12年 8 月

京 都 大 学 經 済 學 會

倫理的行動の正当化

——機械論的人間像からの脱却——

山 根 卓 二

I は じ め に

新古典派経済学の想定する合理的経済人の仮定は，これまで多くの論者によって批判されてきた。批判の大部分は主に(1)最適化行動の能力的限界に対するもの，(2)個人の目的が所与であることに対するもの，の二つに集中している。本稿のテーマは専ら(2)に関連する。

目的の所与性についての批判は，古くは制度学派のヴェブレン Veblen やナイト Knight に遡る。Veblen [1898] は，人間を，与えられた要因に単に反応する機械のようなものとしてではなく，過去の自分自身の経験，歴史，文化に影響を受けながら，その社会の思考習慣の形成にかかわる一個人として捉えた。Knight [1933] は，人間は現在与えられている快楽に反応して行動するのではなく，未来に対するイメージに反応して行動するのだと述べ，われわれは行動する前に無数の対象からなる世界から適切な対象を採りだしてまとめ上げる作業を行っている，と主張した。最近でも制度学派や経済哲学の立場から，ホジソン Hodgson やコスロフスキー Koslowski などによって二人の思想の再評価が行われている¹⁾。

日本では戦前において，倫理学者の和辻 [1962] が合理的経済人を批判して，人間は欲望充足のためにのみ生きるのではなく，経済的活動の目的はむしろ欲望充足を手段として仲間意識を育てることだと指摘した。戦後，アメリカ経済

1) ホジソン [1997]，コスロフスキー [1996] などを参照。

学の輸入の影響で経済学内部からの経済人批判は下火になるが、経済学以外の立場からの興味深い指摘がいくつかある。佐伯 [1980] は認知科学の見地から、われわれの認識の視野が拡大したり深まったりするにつれて、手段や目的が異なり得ることを指摘した。また社会学の立場から、盛山 [1995] は、ミクロ経済学では個人がおかれた状況や個人が思念した意味はモデル的に固定されていると批判し、その行為者の問題関心や自己解釈という「意味」の側面を抜きにしては、そのひとの目的を特定化できないと主張した。

以上の論者が共通して主張していることは、人間には最適化という問題が既に用意されているのではなく、むしろ人間はその時その場所の文脈を把握しながら自分で問題を構成しなければならない主体であるということである。本稿の目的は、合理的経済人の人間像では捉えきれない倫理的行動、特に Sen [1977] が提出した「コミットメント」行動を、上の論者たちや以下で説明するプラグマティズムが描く人間像によって説明することである。

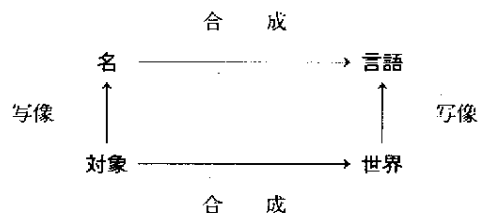
次の第Ⅱ節では、ヴェブレンやナイトにも影響を与えたプラグマティズムの世界観と、プラグマティズムの社会科学への応用を紹介する。第Ⅲ節では、まず Sen の agency 概念を説明し、それとプラグマティズムの人間像との相似点を指摘した上で、コミットメント行動の本質は agency 概念から説明できると主張する。第Ⅳ節では、agency の側面を有したわれわれは、常に目的の価値について問い続けなければならないと主張して本稿を結ぶ。

Ⅱ プラグマティズムの認識論

1 思想の特徴

プラグマティズムの思想は、19世紀後半に進化論の影響を受けたアメリカの哲学者 パース Peirce によって創始され、その後20世紀に入ってジェームズ James、デューイ Dewey、ミード Mead などに引き継がれ、価値論、倫理学、心理学、宗教学などに応用された。この思想の特徴を全て紹介することは紙幅を費やし、また経済学との関連性が見えにくくなるので、本稿のテーマに関連

第1図 ウィトゲンシュタインの写像理論



出所：グレーリング [1994] 64ページをもとに作成。

するものに集中して説明したい。他の特徴については、この中心テーマを補完する形で述べることにする。

本稿で注目するプラグマティズムの思想の特徴とは、我々が「世界」²⁾の構造を把握し記述する仕方は一定でなく、記述方法は我々の行為との関係で我々自身によって構成される、というものである。それに対して、我々に比較的なじみの深い実証主義の認識論の特徴は、我々が世界の構造を把握する仕方は唯一つしかなくそれを写しとる、というものである。

このプラグマティズムの認識と実証主義のそれとの違いを際立たせるために、ウィトゲンシュタイン Wittgenstein の前期と後期の思想を紹介することは有効である³⁾。かれは最初、20世紀のはじめに流行した論理実証主義の立役者であったが（前期ウィトゲンシュタインといわれる）、その後ラムジー Ramsey の影響を受けてプラグマティズム的な思想を持つようになる（後期ウィトゲンシュタイン）。

前期の代表作『論理哲学論考』において、ウィトゲンシュタインは原子論的な世界の記述方法を展開した。これは一般に「写像理論」と呼ばれる。この理論を下の第1図を用いて説明すると以下ようになる。彼によれば、この世界

2) 「世界」とは、われわれになじみ深い用語でいえば「事実」に相当するが、以下で説明するウィトゲンシュタインの用法に従って「世界」の方を用いる。ウィトゲンシュタインによれば、事実の集まりが世界である。

3) 清水 [1972] 第Ⅲ部や、グレーリング [1994] などを参照。

とそれを記述する我々の言語にはそれぞれ構造があるという。世界は「対象」という原子的要素から成り、言語は「名」という最終的な要素から成っている⁴⁾。そして対象と名との間には一対一の対応関係がある。名とは対象をことばに写しとったものである。諸対象を名ということばに写しとり、名についての記述を形式論理によって合成すれば世界の記述ができあがる。

一見すると、これはごく当たり前のことをいっているにすぎないように思える。しかし後期ウィトゲンシュタインはこの認識の構図に対して異議を唱えるようになった。それが彼の後期の代表作『哲学探究』にあらわれている。彼は次のようにいう。「しかし、実在が合成されるような単純な構成要素とは、どんなものなのか。——ある椅子の、単純な構成要素は何か。——椅子を組み立てている木材の断片なのか。あるいは分子なのか。それとも原子なのか。」⁵⁾彼が主張したいのは、人間による解釈を離れては対象の意味は決定されない、ということである。前期の思想では、一つの対象には一つの名や意味が対応していて、世界の記述の仕方が唯一つしか存在しなかった。しかし、対象の意味は状況や文脈に応じて異なり得る。椅子は、物理学者にとって素粒子の固まりであり、木工業者にとっては寄せ木細工であり、贈り物としては親しみのシンボルである。最初にプラグマティズムの特徴について、「世界の記述の仕方は我々の行為との関係で我々自身によって構成される」といったのはこのためである。

2 社会科学への応用

ここからはプラグマティズム、特にデューイ、ミードの思想を社会科学に応用し、「シンボリック相互作用論」という一分野を築いたブルーマー [1991] の理論を紹介して、経済学との関連性をみることにしたい。ブルーマー Blumer

4) 正確に言えば、対象と世界の間には「事態」と「事実」という中間段階がある。事態は対象の合成であり、事実は事態の合成であり、世界は事実の合成である。同様に、名と言語の間には「要素命題」と「命題」がある。要素命題、命題は各々事態、事実の像である。

5) ウィトゲンシュタイン [1976] 47, 51ページ。

は、社会を個人が単に所与の要因に対して反応する場としてとらえるのではなく、個人が自己や他者を含めたいろいろなものごとに対して意味づけを行い、行為を自ら構成していく過程である、ととらえている。経済学に特定していえば、個人は所与の目的に対してより効率的な手段を選ぶ以前に、自分がおかれている状況を把握して目的を自ら構成する存在であるということになる。以下では、彼の社会科学理論の詳細を対象、人間行為、社会的相互作用の見地からそれぞれ個別に見ていくことにする。

(1) 対象 まず、対象について彼は次のようにいう。「シンボリック相互作用論の立場からすれば、人間と、彼らの集団にとっての『世界』とは、『対象』から構成されるものである。……対象とは、指示されうるあらゆるものごと、つまり、指摘し言及することができる全てのものごとである。雲、書物、立法者、銀行家、宗教的信条、幽霊などなどの全てである。」⁶⁾ 対象は(a)物理的对象、(b)社会的対象、(c)抽象的な対象、の三種類に分類されるが(上の例の前二つは(a)、中間二つは(b)、後二つは(c)の分類に相当する)、とにかく人間が意味づけできるあらゆるものを対象と見なすことができる。個人は常にこれらの対象を解釈し、定義し続ける存在である。そして重要なことに、個人は自己も対象として意味づけしている。そのことによって自己以外の対象の意味づけも変わってくる。このことは後に自由意志について説明するときに重要性を帯びてくる。

個人は自分自身も対象として意味づけしているということを、和辻 [1962] からの引用で説明しよう。「たとえば一人の労働者が工場において労働し、それに対して賃金を得る。その賃金をもって衣食住の必需品を買い、それによって欲望を充足する。そうすればこの労働者は欲望充足のために労働しているのではないか。かく人はいうであろう。ところでその事実を突き留めようとしてこの労働者の生活を詳しく考察するならば、事態はしかく簡単ではない。……[彼が] 目指しているのは家族の喜びであって食欲の充足ではない。たといそ

6) ブルーマー [1991] 13ページ。

の喜びが食欲の充足を介して得られるとしても、その充足は手段であって目的ではない（傍点は本人）。⁷⁾ この労働者は観察者から見れば「消費者」であり、「衣食住の必需品」が手段、「食欲の充足」が彼の目的であると見られる。しかし労働者本人は、自己を「夫」でありかつ「父親」と意味づけ、「食欲の充足」を手段、「家族の喜び」を目的と意味づけているのである。

(2) 人間行為 次に人間の行為についてであるが、ブルーマーによれば、人間行為の本質とは、「自分が気づいた各種のものごとを考慮し、それらをどう評価したかということに依拠して行為を作っていく」⁸⁾ ことであり、「自分の内部で作用している要因に反応して、単に行為を解放する」⁹⁾ ことではない。この指摘は現代の制度学派が新古典派経済学に対して行っている批判とほぼ同じである。新古典派経済学では、所与の目的に従って行動する個人は考察されるが、目的の設定や行為の計画がどのようにして立てられたのかは問われない。

しかし、目的の設定もしくは行為の計画は人間にとって絶対不可欠である。なぜなら、既に述べたように、世界には無数の対象が存在するからである。このことから、今まで説明してこなかったプラグマティズムの思想の進化論的な特徴がでてくる。

その進化論の特徴は、パースやデューイの「探求 (inquiry)」の概念に代表される。探求とは、プラグマティズムの用語でいえば疑念を信念に、ナイトの用語でいえば、不確実性を確実性へと導くプロセスである。ナイトによれば、不確実であるのは、世界には構成要素が無数に含まれており、世界の把握の仕方も無限に存在するからである¹⁰⁾。つまり、ここでいう不確実性とは、一体どの世界の記述の仕方が適切なのか分からない、という意味である。世界の見方が一定で、何が目的で何が手段であるかが既に決まっているのであれば計画を立てる必要はなく、あとは最適化問題を解くだけとなる。しかし問題は「学校

7) 和辻 [1962] 483-484ページ。

8) ブルーマー、前掲書、20ページ。

9) 同上、19ページ。

10) Knight [1933] Ch. 7.

の算数の『問題』のように、人から与えられてとりかかる仕事ではない。』¹¹⁾ 不確実であることこそが探求の出発点である。

不確実な状況におかれた人間は、それを確実な状況に近づけるために世界の把握、記述にとりかからねばならない。まず、観察によって、問題を構成するのに必要な要素を対象として定義、解釈し採用する。第Ⅱ節2(1)項で説明されたように、対象は(a)~(c)のどんなものでもよい。次に、これらの対象間の因果関係を把握する。これも第Ⅱ節2(1)項でみたように自己も一つの対象となるから、自己以外の対象と対象としての自己との因果関係も把握する必要がある。これらの作業によって初めて、手段や目的を設定できる。

しかし、この定義、解釈、因果関係の把握は飽くまで一時的な仮説である。仮説（諸対象の採用、定義、解釈とそれらの因果関係）の適切さは実際に実行してみなければ判明しない。というのは、その仮説に従って実行してみたら、構成要素として採用しなかった対象が実はその問題にとって重要項目であったり、逆に、採用した対象が問題にとって全く関係のないものであるかもしれない。また、対象の定義、解釈やそれらの因果関係が間違っていたということもあり得るからである。これと対比していえば、期待効用理論での不確実性（ナイトの用語で「リスク」）とは、採用された対象間での不確実性である。それは真性の不確実性が解決されてから初めて問題になる。再度繰り返すと、真性の不確実性は世界の記述方法の多様性に起因する。不確実な状況が改善されなければ、今まで用いていた古い定義や解釈は破棄され、新しい定義や解釈が必要となる。

このようにして、解釈、定義、実行、再解釈、再定義という一連の過程を通じて、確実な世界の記述方法が確立される。パースによれば、この確定した信念が「習慣」である¹²⁾。プラグマティズムにおける習慣は、高い利得を獲得した者たちによって形成されるのではなく、不確実性が取り除かれることによ

11) デューイ [1980] 495ページ。

12) パース [1980] 53-75ページ。

て形成されるのである。

(3) 社会的相互作用 最後に社会的相互作用である。相互作用の特徴は「定義」と「解釈」のプロセスにある。これまでこの二つのキーワードを区別することなく使ってきた。「解釈とは、他者の行為や言及の意味を確定することであり、定義とは、自分がどう行為しようとしているのかに関する指示を他者に対して伝達することである（傍点は本人）。」¹³⁾ 人間の相互作用とはこの解釈と定義の繰り返しである。個人は他者の行為の意味を解釈し、それを材料として自分の行為の意味を定義する。他者はその行為の意味を解釈し、それを材料にして彼の行為の意味を定義する。

これはゲーム理論における人間行為の相互作用とは異なる。ゲーム理論では個々人の目的の意味が何であれ、それは所与であり、他者の行為を気にするのは全てその個人の目的を最大化するためである。これに対してシンボリックな相互作用では、個人は、所与の目的のために他者の行為に直接反応するのではなく、他者の行為の意味を解釈することによって目的を自ら構成する。人間の行為に最適化の側面があることも否定できないが、その前に必ず解釈の過程があることが主張される。

III センの agency 概念とコミットメント

1 センとプラグマティズムの人間像の相似点

アマルティア・センは、新古典派経済学が想定する、単一の万能な選好順序を完備した合理的経済人を批判し、その人間像を指して「合理的な愚か者」(rational fool) と呼んだ。彼によれば、合理的経済人が愚か者であるのは「政治的価値、階級利害、共同体精神、社会的風習」などの諸概念を区別することなしに、それらを全て効用と見なし、それを最大化することのみに関心を持っているからである¹⁴⁾。

13) ブルーマー、前掲書、84ページ。

14) Sen [1980] p. 363.

彼はこのようなものごとの意味を区別できない人間像が生み出されてしまう原因を、経済学が予測 (prediction) や処方箋 (prescription) のみに専念し、記述 (description) に関する理論を欠いているからだと主張する。彼は世界の記述に関して次のようにいう。「真理を含んだものから逸脱していないときでさえも、真の言明の集合から適切な部分集合を選択する問題が存在する。」¹⁵⁾ センも、プラグマティストと同じように、正しい世界の記述の仕方は無数に存在するが、重要なのはその中から適切なものを採用することなのだといっているのである。

センは新古典派経済学の人間像を克服するためにそれに対抗するものとして、互いに還元できない二つの人間概念を提唱した。それが well-being と agency である¹⁶⁾。

2 well-being, agency と自由意志

well-being とは、単なる効用という曖昧で短絡的な概念とは違うが、さしあたって表現すれば、見た目にその人が幸せであるかどうか、飢えているかどうか、衛生状態がよいかどうかというような側面から見た人間像である。

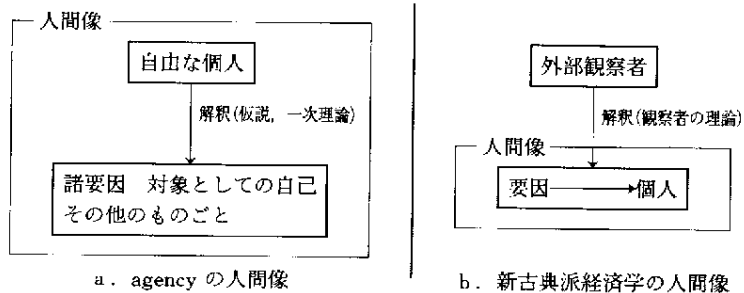
それに対して agency とは、いろいろなものごとを評価し、目的を自ら構成する主体である。これは第Ⅱ節で説明してきたプラグマティズムの人間像とほぼ重なる。この主体は、自律 (autonomy) や自由意志 (free will) という意味での自由を持っている。これはいわゆる「選択の自由」といわれるような、目的が所与のもとの諸手段間の選択の自由とは異なる。agency の自由は目的の構成の自由であるから、それは選択の自由を包含している。

センは agency と well-being が新古典派経済学においては混同され、agency が well-being に還元される傾向があることを指摘する。しかし第Ⅱ節で説

15) *Ibid.*, p. 361.

16) Well-being は善き生、agency は行動主体と訳されるときがあるが、よい訳が見当たらないので以下では原語のままで記す。

第2図 agency の人間像と新古典派経済学の人間像



明してきたことを考慮に入れ、自由意志の存在を確信するならば、そのようなことはあり得ないことが分かる。これを以下の第2図によって説明しよう。

ブルーマーの人間像(第2図a)において、個人はあらゆるものごとと同様に自分自身も対象として解釈していることを第Ⅱ節2(1)項で述べた。この自己の対象化が社会科学にとって決定的に重要である。個人は、観察によってその文脈において適切な諸対象を採用し、それらと「対象としての自己」との因果関係を把握する。人間の行動は確かにいろいろな要因によって影響を受ける。しかし、それらの諸要因に反応するのは、それらと「対象としての自己」との因果関係を把握した後である。自由意志を持った人間は、因果の連鎖に組み込まれず、むしろ因果関係の外に出てその因果関係を仮説として形成する主体である¹⁷⁾(第2図a参照)。センの主張をプラグマティズムによって解釈すれば、この自分なりの理論仮説を形成する主体が agency であるといえるだろう。

一方、新古典派経済学の人間像(第2図b)においては、諸対象の解釈は観察者の判断に委ねられている。対象とされた個人はいろいろなものごとが何であるかについて解釈しないし、自分がその文脈ではどのような役割を演ずるのかについても解釈しない。個人は因果の流れの中にあり、与えられた要因に完全に支配されている。よって人間の側面は全て well-being に還元されてしま

17) カント [1961-1962] 中巻、第二部第二篇第二章、参照。自由とはもともと「自らに由来する」という意味であり、原因とはなり得ても決して結果にはならない主体のことを指す。

う。

しかし上で見たように、人間には agency の側面があり、「agency の自由は事前に特定化されたどんな目的によっても考察され得ない。」¹⁸⁾ 従って、社会学者が「ある個人の行為を理解するためには、その行為者の定義の過程の内部に入り込まなくてはならない」のである¹⁹⁾。盛山 [1995] は各個人がそれぞれ独自に定義、解釈した世界観を「一次理論」と呼び、一次理論を持った諸個人の相互作用を観察する理論を「二次理論」と呼んで区別した²⁰⁾。モデル中の個人の一次理論は観察者の理論ではない。観察者はそのひと自身の一次理論を持った一人の人間にすぎないことをヴェブレンも指摘している²¹⁾。

3 agency とコミットメント

Sen [1977] は合理的経済人の仮説を批判するために、新古典派経済学では説明できない人間の行動として「コミットメント」を挙げた。コミットメントは、例えば、他者が虐待を受けているのを知って自分の厚生水準が下がるわけではないが、その虐待を不正であると考えて敢えて立ち上がる、というような行動である。セン自身はコミットメントの例として、アパルトヘイトに反対して南アフリカの果物をボイコットする行動などを挙げている。

センは、新古典派の想定する単一な選好順序に対抗して「選好順序の順序」というメタ・ランク付けについて考え、これを用いてコミットメントを説明する。例えば、野菜料理よりも肉料理の方が好きであるが、動物虐待に反対の立場であるので肉食主義になりたいと思っている人を考察する²²⁾。この人の二財間の選好を見れば (肉) > (野菜) である。しかし、もっと上のレベルでこの人は、肉を野菜よりも選好することよりも、野菜を肉よりも選好することを望ん

18) Sen [1985] p. 204.

19) フルーマー、前掲書、20ページ。

20) 盛山 [1995] 7章以降。

21) Veblen [1898] p. 395.

22) Sen [1982a] p. 81.

でいる。つまり、[(野菜)>(肉)]>[(肉)>(野菜)]である。このメタ-レベルの選好による行動がコミットメントであるということになる。

しかしこの方法は、経済人批判としては誤解を与えやすいように思われる。それは、その個人自身による対象に関する解釈段階の説明が抜けているからである。諸財間の選好順序が与えられており、そのメタ-レベルとして選好順序の順序があるとしても、特定の文脈ではその二つの記述のうちどちらが適切なのかという問題が残る。いいかえれば、well-being だけが問題であるように見えて、agency の側面が捉えきれていない。

コミットメント行動の本質は、そのようなメタ-ランクの順序があるのに加えて、個人が文脈に応じて（自己を含む）対象を意味づけ、諸目的の間の関係を考慮しながら選好構造を自ら構成している、ということにあるのではないだろうか。上の例では、その個人が自己を「動物愛護家」と意味づけていることがコミットメントの本質であろう。センもこの本質に気づいたからこそ、このとき（1977年）以降、世界の記述（description）の仕方を問題にし（1980年）、well-being と agency の区別を主張した（1985年）のではないかと推察される。

IV むすび——価値を問うことの重要性

本稿では、新古典派経済学の想定する合理的経済人に対抗する人間像を、プラグマティズムの社会科学理論とセンが想定する自由意志を持ったagency概念の類似点を指摘しながら、コミットメント行動の本質を考察した。しかし、新古典派のモデルの代用となるモデルを具体的に構築したわけではなかった。

ただいえることは、人間の行動を事前に全てプログラムしておくような相互作用モデルは人間行為の本質を捉えることに失敗するであろう、ということである。たとえ選好や目的が変化するモデルであっても、変化自体が観察者によって全て指定されているならば、選好や目的が固定されたモデルと本質は変わらない。人間は、プログラムされたことをただ実行する機械ではなく、いろいろなものごとを観察し対象化することによって、自分自身で行動をプロ

グラムする主体なのである。

しかし、人間が自由意志を持っているからといって自由ばかりを尊重し、なすがままにしておけばよい、ということは主張しない。第Ⅱ節2(3)項で指摘したように、定義と解釈による社会的相互作用を通じて、個人の抱く価値や意味の内容は常に外界の影響を受け続ける。そして第Ⅱ節2(2)項で見たように、解釈は常に適切であるとは限らない。例えば、宣伝広告に影響されて物質的な豊かさを望んで活動していたけれども何か満たされず、後になって実は家族の愛情の方が欲しかったのだと反省することがあるかもしれない。agencyの側面を有したわれわれは自由意志を持っているからこそ、常に選好や目的の価値、内容の適切さについて議論し続けなければならない。いいかえれば、適切な世界の記述の仕方を確立していかなければならない。

価値を問うことの重要性は、特に最近重要性を帯びてきた、環境、文化、教育などの分野でも認識されるべきであろう。現在行われているように、これらの価値を貨幣換算して効率性を考えることは必要なことであるが、それは飽くまで一つの価値基準にすぎず、それで十分ではない。それ以前の段階で、環境、文化、教育そのものの意味や価値、そしてそれらとわれわれとの関係について真剣に議論しなければならない。そしてその前提として、与えられた問題を解くことよりも、問題をいかに構成するかに重点をおいた教育が必要となるであろう。

参考文献

- ウィトゲンシュタイン、L., 藤本隆志訳 [1976] 『哲学探究』(ウィトゲンシュタイン全集8) 大修館書店。
- , 山元一郎訳 [1980] 『論理哲学論』(世界の名著70) 中公パックス。
- カント、I., 篠田英雄訳 [1960] 『道徳形而上学原論』岩波文庫。
- , 篠田英雄訳 [1961-1962] 『純粹理性批判』岩波文庫。
- グレーリング、A. C., 岩坂彰訳 [1994] 『ウィトゲンシュタイン』講談社選書メチエ。
- コスロフスキー、P., 山脇直司・橋本努訳 [1996] 『資本主義の倫理』新世社。

- 佐伯 胖 [1980] 『「きめ方」の論理』東京大学出版会。
- 清水幾太郎 [1972] 『倫理学ノート』岩波書店。
- 盛山和夫 [1995] 『制度論の構図』創文社。
- デューイ, J., 清水幾太郎訳 [1968] 『哲学の改造』岩波文庫。
- , 上山春平訳 [1980] 『論理学—探求の理論』(世界の名著59) 中公バックス。
- パース, C. S., 上山春平・山下正男訳 [1980] 『論文集』(世界の名著59) 中公バックス。
- , 浅輪幸夫訳 [1982] 『偶然・愛・論理』三一書房。
- ブルーマー, H., 後藤将之訳 [1991] 『シンボリック相互作用論』勁草書房。
- ホジソン, G. M., 八木紀一郎・橋本昭一・家本博一・中久俊博訳 [1997] 『現代制度派経済学宣言』名古屋大学出版会。
- ラムジー, F. P. [1996] 「真理と確率」(D. H. メラー編, 伊藤邦武・橋本康二訳『ラムジー哲学論文集』勁草書房)。
- 和辻哲郎 [1962] 『倫理学』(和辻哲郎全集10) 岩波書店。
- Knight, F. H. [1933] *Risk, Uncertainty and Profit*, New York, Kelly and Millman.
- [1935] *The Ethics of Competition and Other Essays*, London, Allen and Unwin.
- Putnam, H. [1987] *The Many Faces of Realism*, La Salle, Open Court.
- Sen, A. K. [1974] "Choice orderings and morality" in *Practical Reason*, ed. by Kornner, S., Oxford, Blackwell. reprinted in Sen [1982a], pp. 74-83.
- [1977] "Rational fools: A critique of the behavioral foundations of economic theory," *Philosophy and Public Affairs*, 6. reprinted in Sen [1982a], pp. 84-106.
- [1980] "Description as choice," *Oxford Economic Papers* 32, pp. 353-369. reprinted in Sen [1982a], pp. 432-449.
- [1982a] *Choice, Welfare and Measurement*, London, Harvard University Press.
- [1982b] "Rights and agency," *Philosophy and Public Affairs*, 11, pp. 3-39.
- [1985] "Well-being, agency and freedom," *The Journal of Philosophy*, 82, pp. 169-221.
- [1987] *On Ethics and Economics*, Basil Blackwell.
- Veblen, T. B. [1898] "Why is economics not an evolutionary science?," *Quarterly Journal of Economics*, 12, pp. 373-397.